(本號八面)　(明治廿二年十月廿一日　郵便報知新聞　明治二十年十月十一日　第四千四百八號　(定價金二錢五厘)

時事新報

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり　時事新報には每號詳細なる商況物價の報告あり

明治廿八年十月十一日　金曜日
舊暦乙未八月廿三日　(辛、卯)
日入午後五時四十五分
月出午後十時十七分
月入午前零時四十二分
滿潮午前九時四十六分
滿潮午後二十六分
【西暦一千八百九十五年】
二百八十四日
年末まで
八十一日
明治十年より年末まで

時事新報

世界周航

海軍の擴張に就ては軍艦の製造は申す迄もなく士官の養成、兵器の充實、船渠兵廠の建築等新に施設を要するもの一にして足らず何れも擴張の新事業にして目下の急なれども我輩は其擴張の機會に際し兼々主張したる世界周航の實行を希望するものなり從來我軍艦の遠航は常備艦隊が時々支那朝鮮の諸港及び露領浦鹽斯偉の邊に至ると海軍兵學校の卒業生に實地の運用術を練習せしむるが爲め凡そ一年一回練習艦を南洋諸嶋もしくは漆洲に航せしむるとに過ぎず尤も明治十三年に清輝艦が歐洲を周航し又同二十三年に比叡金剛の二艦が我國の海岸にて沈没したる土耳其軍艦の存命者を載せて彼の國に至りしことあれども是れは例外の例にして海軍の創設三十何年來日本の軍艦は一の艦隊として世界各國人の目に觸れたることなし海國の不面目に非ずして何ぞや蓋し海軍の部内にも世界周航の說は頗りに行はれて實際に計畫を立てたるものさへあれども何分にも經費の足らざるが爲めに折角の計畫も實行に差支へて其儘に成行きたる次第なりと云ふ遺憾の至りなれども既往の事は兎も角もとして今回の戰爭に黃海の激戰、威海衛の攻擊の如きは我海軍の伎倆を實際に發表して世界の耳目を驚かし日本は單に陸戰に强きのみならず海戰の伎倆も亦驚く可きものありとて世界到る處に大評判の折柄なれば此機會を外さず少なくも二三隻の軍艦を以て一の艦隊を組織し世界の周航を企て以て宿昔の遺憾を消せんかと我輩の敢て希望する所なり周航の利益を云へば第一に海軍々人の經驗知識を增すは勿論、間接には商賣貿易を奬勵し國光を世界に發揚するの効能ある可し今の世界には何れの海洋を航するも海賊等に遭うて我武を示すの機會は決して望む可らざるも未知の海上風波の危險を冒して乘組員の腕を練るの利益は申すまでもなく外國の港に入りて他の軍艦と相接するときは素より平和の交際にして互に禮讓を守る其中にも嚴然相對峙して一擊一動苟もせざるは恰も封建の藩士が他藩士に接するものと趣を異にし相互に警戒すると共に相互に威嚴を重んじ自から武人の氣品を高尚にするの機會少なからざる可し又英國などの例を見るに所屬の植民地は勿論、苟も自國の商賣の行はるゝ地方には時々軍艦を派遣するの常なり敢て力を以て商賣を保護するものに非ずとは雖も背後に軍艦の顯はるゝときは商賣人は安心して事を行ひ益々進取の勇氣を生ずるの勢能あればなり今や日本の商賣も次第に擴張して現に印度には汽船の航路を開き又米國桑港及び南洋諸嶋の邊には我商人の住居して幾を爲ひもの少なからず今後ますます進歩の一方にして既に海外の航路擴張の計畫さへあるほどの次第なれば軍艦の周航は商賣奬勵の手段としても最も有効のものなる可し又今回の戰勝に海外諸國の人々は何れも日本海軍の威容を想像して措かざる其處に眼前に戰勝國の軍艦を目擊し又親しく軍人に接するときは其感情も亦一入にして益々國光を發揚するの結果は疑ふ可らず何れの點より見るも其效能の著しきは一般に認むる所なり世界を周航するには費用も少からざれども實際の效能を見れば其費用は物の數にも非ず此機會に實行を企て是れを第一着として今後は二年に一回もしくは三年に一回づゝ行ふまじ爲し終には彼の英國の周行艦隊の如く我軍艦の若干隻は常に海外に在て日本海軍を代表せしむるの趣向に至らしめんかと我輩の敢て希望する所なり或は我軍艦の外航に就ては威海衛に於て收容したる彼の捕獲艦をも伴ひ日本の戰勝を海外に誇る可しとの說もあれども戰勝の事實は既に已に滿世界の認むる所なれば日清兩國の交際全く舊に復したる今日に當り斯る兒戲を演じて徒に他の感情を損するが如きは實際無益の殺生と云はざるを得ず我輩の序ながら一言して戒むる所なり

雜報

○臺灣通信

第四十一信　特派員　卷水生

九月十五日於彰化城

彰化城の大勢

山を挾んで河に臨み右に蜿蜒たる遠山遙峰を含み左に杳々たる蒼海碧空を眺め城郭綽く繞りて樓門高く聳え大小の畫棲紅欄市中に櫛比す彰化の地形佳ならざるにあらず名勝故跡亦尠しとせず予彰化に到るの日戰事既に了りて又見るべき者なし即ち去て臺灣に到る大勢に乘じて回る豈に圖らんや彰化城内亦罹病者多く兵士人夫は勿論憲兵、郵便局員より新聞記者等十中の八九及び人夫に至ては一人も健康なる者なく悉く支那人夫を雇はざるを得ざるに至れり然るに支那人夫も亦病の爲に引退するに至る予始めて瘴癘の毒氣の恐るべきを知りぬ蓋し城内に腐沼二十餘箇所あり水深うして魚躍る其中にも歴然相對峙して一擊一動苟もせざるは恰も封建の藩士が他藩士に接するものと趣を異にし相互に警戒すると共に相互に威嚴を重んじ自から武人の氣品を高尚にするの機會少なからざる可し又英國などの例を見るに所屬の植民地は勿論、苟も自國の商賣の行はるゝ地方には時々軍艦を派遣するの常なり敢て力を以て商賣を保護するものに非ずとは雖も背後に軍艦の顯はるゝときは商賣人は安心して事を行ひ益々進取の勇氣を生ずるの勢能あればなり今や日本の商賣も次第に擴張して現に印度には汽船の航路を開き又米國桑港及び南洋諸嶋の邊には我商人の住居して幾を爲ひもの少なからず今後ますます進歩の一方にして既に海外の航路擴張の計畫さへあるほどの次第なれば軍艦の周航は商賣奬勵の手段としても最も有効のものなる可し又今回の戰勝に海外諸國の人々は何れも日本海軍の威容を想像して措かざる其處に眼前に戰勝國の軍艦を目擊し又親しく軍人に接するときは其感情も亦一入にして益々國光を發揚するの結果は疑ふ可らず何れの點より見るも其效能の著しきは一般に認むる所なり世界を周航するには費用も少からざれども實際の效能を見れば其費用は物の數にも非ず此機會に實行を企て是れを第一着として今後は二年に一回もしくは三年に一回づゝ行ふまじ爲し終には彼の英國の周行艦隊の如く我軍艦の若干隻は常に海外に在て日本海軍を代表せしむるの趣向に至らしめんかと我輩の敢て希望する所なり或は我軍艦の外航に就ては威海衛に於て收容したる彼の捕獲艦をも伴ひ日本の戰勝を海外に誇る可しとの說もあれども戰勝の事實は既に已に滿世界の認むる所なれば日清兩國の交際全く舊に復したる今日に當り斯る兒戲を演じて徒に他の感情を損するが如きは實際無益の殺生と云はざるを得ず我輩の序ながら一言して戒むる所なり

免かれざるならんと思はるゝは河水暴漲の妨害是れなり予の臺灣附近に於て素練の斜に靡きたる如き急流に肝を冷したるときは下流に於て電信も郵便も不通となりたる時なりきその暴も甚しきは去る十一日彰化より發したる郵便脚夫中支那人一名大甲溪の下流に於て急流中に陷溺し生死不明なりと聞けども電信も不通なれば其後如何にぜしやを知らず郵便物等も亦果して無事に達したるやを知らず斯の如き災難は今後とも尚ほ覺悟せざるべからず而して其來る必ずしも暴雨の後にあらず天に一點の雲なく地に雨降らざるも上流の山中に於て驟雨連日に亘れば急流時を選ばず旅行者の最も恐るゝ所なり

電信の妨害者

予始め新竹より各兵站部を經て彰化に達するや途上最も感に堪へざるは電信線の無事なりし一條なり電線素より急設に係る者なれば或は地上に引き或は屋角を巻き或は竹木の枝に懸る等之を切斷せんとならば一舉手の勢を要せざるなり然るに土人之に向て毫も妨害を爲さゞる者眞に彼等の柔順なるを證するに足るべしと然れども數日を經るの後彼等の民情風俗を聞くに及んで油斷すべからざるを知れり果せる哉牛馬頭附近の地に於て二三の妨害者現はれ電線を切斷したる由蓋し小事の爭鬪より私の怨を報ぜんとして茲に及ぶたる者なりと

苗蔚

臺灣に至りしより家屋の構造多く煙瓦甓なるを以て第一に地震ありや否やを疑へり或者は曰く火山の連脈に當るを以てみれ有りと或者は曰く家屋の構造土より無すも絶無なりと之を土人に問ふも判然せざりしが舊誌に據れば大地震あるみなを證するに足れり獨り地震のみならず災害の多きは大風雨にあるが如し就中夏と秋とに多く六七の兩月最も恐るべき者の如し左表は彰化附近の事に止る者なれども其一斑を推知するに足れり

雍正三年秋七月大風
八年秋八月十日地震
十三年冬十二月十七日丑時大震
乾隆三年夏六月大水
五年夏六月二十四日大風雨四日
九年冬十二月白沙墩雷擊死臣魚二十二尾于沙上
十三年夏六月大雨水
十四年秋七月大雨水
十五年秋七月大雨水、八月大風壞民舍無算
十七年夏六月地震、秋七月大風壞民舍無算
嘉慶元年秋九月大風
六年夏六月大雨水、秋八月大風損傷禾稼
十九年秋九月大風雨、冬十月大風
二十三年秋七月大旱、冬十月大風三晝夜
三十三年夏六月大雨水
三十七年秋七月大雨水
三十九年春三月己巳地大震
四十九年秋八月丁未夜大風雨、拔大木、壞民舍、海舶登陸岸
五十一年夏四月柴坑仔莊、有妖鳥、棲於樹二十餘、乃去不知所在冬十有一月三星夜墜、大如斗、其聲如雷
一星墜於南、一星墜於西、一星墜於澎湖海中大石上石變
五十二年秋八月鹿雨連旬、平地水深三尺
五十三年春二月大雨水
五十四年春三月旱、夏四月大旱、至五月十日始雨
五十七年夏六月丁亥地大震
五十九年冬十月大風
六十年春三月夜有星墜於海、冬七月戊子地大震、已丑復大震
嘉慶元年秋九月大風

郵便の延滯

郵便漸く野戰郵便局を開きたる位なれば去月初の分も去る月末の分も一緒に到着するは是非なきみとにて多少の延滯を免れざるは勿論更に今後とても往々延滯を免かれざるべし

○二井家の八郎右工門氏

八郎右工門氏妻せりと云ふ